仁和の歌の抄

五

815.7
M893 k2
m

國立國會圖書館藏書

國立國會圖書館藏書

詞瓊綸五之巻

あそ

○あそのあそびとは。紐鏡の花の形の作りたる薛なり。一の意に出たる三枝信濃の□□□

○[illegible]

詠十五　人[illegible]ばかりふたりをいひてまーしーやさ[illegible]ハ[illegible]

新勅十八　まよひこし[illegible]の中に[illegible]出ぬるぞいろ[illegible]よその[illegible]袖

六帖　[illegible]ぞもむ[illegible]いへをかたらぬよーやそ[illegible]を紫[illegible]

[illegible]十八　かとん[illegible]あぐ[illegible]大神[illegible]義の[illegible]

古和歌集　こよひ[illegible]きぐ[illegible]

源氏若菜下　なき[illegible]ハ出の[illegible]

○いひをそ[illegible]

金七　[illegible]

新十八　[illegible]

後十七　なふたづきの[illegible]みの浦でふことやらのよ[illegible]

後拾十二　[illegible]や[illegible]人[illegible]

金七　[illegible]

新古　[illegible]ちかく[illegible]

○[illegible]

古十四　はの[illegible]

後十一　[illegible]

玉七　[illegible]

古和歌後　かく[illegible]

○[illegible]

百五十五 花もあり人もまたなつかしきこのたびこそ
そのたびこそ

万十七 せぶ〜こそ いきのまつかぜもとへど人めあるこそ
かくあるべきそこそ世こそ八光づり一

○きいそ二つある事

法花十 法さこそ 花はとろとをきまさる光なるぶ八月いろふこそ
万云 八三 此山乃つきぞのしこそ この川のもえぞのこそ
此万葉の歌八こそを二つもこそ一つの光こそ夢ぶいとをづし

○あそこ

古十八 ふるゆくあはもしるこそ立ぶ乃かくこそ
日十七 大そ〜やをそれはひもろふこそ 神代のこもおもへいづこめ

かくのおそくてへをを海こつのふれもしをみそこ

○りこそ

ものそ八月末をおしえかりてはやぶむことの辞しつのものそと

又はじてをぐらのやぶむことはなきハ

後九 人のうへ乃おとゝしゝ乃ばゝ乃ゝ乃ゝ乃

千三　月とくぎりて又りやうくとまつれてきくよ　[さもこそ]　神ぐらまさりて

後拾遺十八又　なげ〳〵へて〳〵又ゐつまでの玉の緒よきしゆ　[さをこそ]　なげ〳〵しりぬき

カ十　くもの絶〳〵城まゐりよの面れはゐにをやむ　[さもこそ]　はく〳〵ゆめれ

後拾遺又　わきて　まはくにたし〳〵ぐ位を位を巻り　[さりこそ]　仲なれなき

後拾遺　かゝくこにをなぐさむやうてかゝくころもきよ　[さもこそ]　ゆめまさりぬき

千九　ちりぐ〳〵ふるかゝくりゐ乃くるゐ　[さもこそ]　くまくしざりれま

山ゐのくハ月てのさるゐ。ぐ後もまゐ〳〵ざりをとゐまゐしめづし

□

○さこそ　下にをを係るも同じ。をハさこそ

見に三つのうり又。一又ハさこそとゐまを

教　二十　れぐををゐふをゐ脇しとかゆひきん人をも花を　[さこそ]　又こそ花

千十三　を和とをぬつ〳〵ふ猫を思人〳〵ゐと　[さこそ]　をこそ。ゐこゐみくまゐ

金八　乃ゐをハ美だりゐてやゐゐをゐ　[さこそ]　ゐこそ。ゐこゐ人りかゐゐ

新十又　おのづゐ　[さこそ]　をゐ。ゐ　おりゐまふまをふ人乃ゐををゐりゐ

同二十　たゐ〳〵べゐ〳〵ゐ和ゐ　[さこそ]　ゐることがゐみちゐゐをのゐりゐのゐゐは

二又ハさぞとゐ〳〵をとゐまを

金四　ゐとゐりやかゐ〳〵ゐのゐ世ゐをゐきで決　[さこそ]　をかゐ和人を法ゐ乃ゐ

千六　いゐのまふゐきひ乃ゐ和ゐこゐゐん　[さこそ]　ゐ世ゐおこのかゐ〳〵ゐ

新八　をきゐの〳〵和面れをのゐ和ゐをへゐ　[さこそ]　ゐ人ゐ意〳〵ゐかゐゐめ

新勅又　定要　ゐぐゐと〳〵被ぐふゐをゐ秋の日ゐ　[さこそ]　みひゐ和ゐをゐをゐゐめ

新又　ゐみゐ世ゐを　[さこそ]　ゐ〳〵ゐをゐ発ゐ此ゐをあめゐ世ゐをあを

25368

三ようハいふ〳〵ゝ仙ていすゝ□さゝを

金七 あさまゝやまどゝ笠しゝゝゝるり草 さゝを を□ゝるゝゝをゝゝゝゝゝ□

千十二 ちひゝゝゝゝゝ

猿女

うれふしハ　そもそも　ひつくり返る　仏かえん　牛　かうかつ　やか

件のうぶごしのさとをハさやうもとゆきし

金七　姜うしぶみひつくりかえる　そもそも　そうつぶつきあうりそも

拍十五　さもさこそ　そをこんこちうかつめこうまどとぶいふ人乃なき

長拍九　さもさこそ　そみやこけちかふやどりせ発こうして夢乃きまうふ

月十六　さもさこそ　そ仏ちくべうまけどうち発ちやくと尼し弱のひつ武

月二十　さもさこそ　そ岩もかうつめちみよう枝さへ枝うありに乃ちう

金三　さもさこそ　そみやこ恵しき旅ちうつめ麻ち者ちさへぬし独う郎

拍八　さもさこそ　そはじふりとち久ちうつ見かひうぬ称きるかきて寄る武

ちうちうハ上のさこそのかちいふしこんちう拍とはしまこそ。さこそこそハおひ
こんこのかちうつめハいうふきこんこのかちうれハこそこしこんちうて寄るも。

その外ちうぶうどうこそ。こまかあどうこへてんれいし。

○おうと結ぶ拍　はしたちいそゆうこそちたこそ下ふかの海ちうし。かこ鼓ひの
かよひうつび。性く寄武かきそ海ちハ武げこし。

長九　ひのひもえどおびがきこそあどう者しぬかりふこそ　才にちうつう

長拍十四　まり結やきしぬち磯よひうちうせ　あうち独　かくハぬきしう

金三　音吸乃月もひうつの浦ちうう波だかり　よりこそ

ちよ　花ぶく花ふこそ　ちうに乃ひしうう武て人うしひそぶ　ふうこ

拍二　春うげてきうんこも　おりひしうふれうぎすおうつ山しん

月十六　ちきつ乃武ちれ　えしう桃のひちうハ拍くぞふりひ成ぬう

月十九　ちのびつちうう　きしうかつ衣人やえんとハ品をさりしを

後拾十七　志ぬびかりなぎさぶ□こそ□。みぎきしりつまてそふべき為ふ□つゝ□ば

まゝ

同千九　たゝちちのはたもかゝるて□こそ□やとふしゝくとハいづこそ立為ゝゝん

□やうハ見づゝし。さもど同じるさうし□重ば。格ハ日トるし

□

為もしかゝるて志ゝと結ぶ格なり。三格の間ふ立て。こゝも後オ三段の花。ゆゑ。後ハ一の

為ふ説ゝ出ある説。今又別ふかゝ□つゝまゝ出せるれハ。け格ふ紫来ゝう

ちゞめて。古一代集にも数ゝくゝび多くゝて。いとみやびやうある説なるふ。

逝き代ゝるハ為ゝ此格の方法ゝ。ゝんゝ。紙ふ芳人ゝうゝしめんゝてし。

河竜一きのふゝと書ゝうし□ゝ。ゝ。ゝ。

詩後撰八　おくふかき　こそ　ぬくまきしの□　紅葉の神りまれなる　きくの川の　せき

風十三　後拾遺　ふれと　こそ　あらぬ　紅葉　ふる　山の　ふもと　形見　はらの月

こもりゐし　□　と　ふ　ふれば　と　はなぎ　て　ぬ　下　はな　へ　つ　き

古今　秋の　秋　ふ　春　こそ　ふを　かし　き　し　ぶ　ふ　し　ぶ　ふ　し　ぶ　ふ　ぶ　と

同五　春の　きて　春　はぬき　こそ　とる　かし　山の　ふ　き　はな　おき　ば　うぐ　ち　る

こもりゐ　は　かし　と　はな　ぶ　ぶ　し　ぶ　ふ　ぶ　ふ　ぶ　ふ　ぶ　ふ　ぶ　ふ　ぶ　ふ　ぶ

といつる　き　り。又　ハ　アル　ニ　ヲ　シ　の　ぬ　ぬ　ん

後拾六　かり　ぬ　こそ　よが　き　に　き　し　ぬ　み　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

詩一　ほの　ぐ　と　き　こそ　ぬ　ふ　き　ふ　き　し　を　ぬ　か　ぐ　山　ふ　ま　ま　ま　ぐ　く

ふ　ま　ま　し　と　ぬ　へ　ア　ケ　四　ル　る　り

ま　く

後八　ふ　り　こそ　今　ハ　き　し　し　を　み　よ　う　世　の　山　ま　し　き　つ　せ　ぬ　ま　す　ぬ　ぬ

こ　ま　ま　ら　し　と　ぬ　ぬ　ぬ。ま　べ　て　ら　し　し　ハ　万　世　に　ぬ　ら　る　ま　し。そ　と　く　こ　ま　ま　か　こ　そ

ら　し　と　ぬ　ぶ　格　ハ。一　の　ま　三　格　の　次　よ　ぬ　ら　る　ま　ま　ま。ま　ハ　ま　の　下　に　と　の　ぬ　ら　る　ま　る

○ま　く　ぬ　ぶ　格　ま　ハ　り　の　ま　と　ら　ふ　ま　ま　の　ま　ま　る　と

十上　ま　を　人　ま　り　と　り　と　ま　ま　ま

新拾遺集

昭ぬまでは法をおくりなのぬ世を[illegible]人をまとまで[illegible]をんとをふふ

金十

いかゝ〜へ月をのこ[illegible]をがゝ[illegible]ゝ今八日波まつこゝろ[illegible]

こゝろ〜の[illegible]ゝ[illegible]ゝて。月のをとりふをとにちかゝ。又金葉の歌八間ふをとり

ふをとは[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

六帖　らむとのひてこざりしよるとまりしらばまくぬーも　てそ　まつおきさきぬ

蜻蛉日記　業平代をよびてよめるべりあねのこ　てそ　あがつうめるよりちひろーべし

業平卿　おのがまゝ　おもてをくへきかとりれどあみごのこ　てそ　袖ふかく　まる

こがらしハ　ふきぬ　鶯

伝俊　赤　うしぬまばうとまやせんと　号上　てそ　ひうむえぬよりもこ　恋ひうびき

てそとのつまてきと　ふぶうす。日本紀　芳紫の　ふよハ　例わるごと。　五そ　来より

こうこう　ふ　ふてうしぞ。ぞよかりぬりめし。

風十　ちてとうるとハをぬぬ〜ハまくつし　美ふれと　てそ　いひ〜　恒うう

ふまハトたるあ　て　初三ごろ　稚ーうそづ　三ごれた

雅平のをぬ　ふをを

ふるる　友　ひうふこと　は　茅ーうのそて　てそ　ちうひきそうつ　なをきこよひまうりを

し　三ハ　ふ　と　ハ　ぬりうれた。　てそ　の　鶯ーりを　をへハめうらぶ　ふ　ふのれハ　こよひふてそ

ふりを　しいとうれバうりそ。りし　又　義ふのこと　ふ　ふ　いとで　三の　ふを　ふ　ふ　ひきつ　ごーや

うにいとぶれを　ぬりぞ。　ふてを　その　弦び　鶯　ハ　ふ　ても　ぬき　ふ　ふよりて。上の　てふを　ふ　ふ　ふ

を　ひを　ふ　ふ　ふ

ゑる。たうくとより下へハ及バざるゝ程をとゝ程との格わりたゝ多ゝ多るとがみし。

○定まれる格をもて切まくる法をつゞくる

後拾六　おなじくぞ書つりしん　と　おり人ぞと志ぬるはせをハまゝぞそゝゝ

金二　いまり山ゝめづまやえんまゝ郭ゝ　ゝまゝ　ゝ　ゝ　

陸奥十一　たく山ぬけ吉水の堂ぬぐ者乃いつろくべ。□と□ふしぬ長沢

長久元年四月　いづくまでおくりはしつ。□と□人とりぐ□なりぬとりれのおくぐ川まで

右の歌どもは。上よりそや伊□□おどの辺あまた。□□□□□。□□□□。

叶橋はおべてのくりよはいりく伏。まこ長月廿五日の夕べ。まこぐひて。よくとりく

とりたべし。こゝ永和元年の会に。おのづりしりよりやかふ。□□□□□□□□□

ろきゆ　べきうるしいふ。ふと。あまやうとい。ゆ。りのもしぬまやあくんと。

侍従の判ふ月しうるハかりる。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

おのづりりたるぬ。にすしうるも。まこど左右りぬ。りめく。叶倒も長月れ

を。ふき雖とハとべりくむ。又黄表丁紙下者に山陰のあ□□□□□□□□□□□□□□

紙の紅葉乃あてかくせだこれハ上よのとりひて。おきといて。結びの橋うあひ

ふたどもかりてきりど耳にさりて。はぐ。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

○硯を墨紙を出ゝ。考て。ある□と

右四　いゆ□と□ハうきこハ日かゝどど紙の表そ紙ふとのかきりあるとれら

仁八　まひてゆくくを。でめんはムくもいづまを。□と□まぞふをちを

円十五　わうを菓ふをうたる。□と□ふひしハはきれぬ人のまろうりりを

板二十　丑中にわくはしうば。□と□ふりふ人をきゞあくもゆくりるかる

こゝろくムのろくはそろふふ泊をうぶきて

ふををふくやて□と□ふてくり

○伊□□はは下を□と□ふる板

右十一　夕月夜さよや器べ乃松の葉のいゆ□と□もを加ね。ゑもをるか那

板一　いつと□と□を。ふれふりハ日りおくにまぐみりーのふを吉ある

右十八　紙ゆうりムの本紙はうつへぬ人のくろもいぐ□と□でふふ

円十八　みやこ人いふふ□と□とりくしふきうくれぬをゆふりぐこと人よ

まる

右四　いゆ□と□を時きわるゆどど紙のよぐを物ふふとはかぎりるをりる

詠十三　をふゆゑ□と　れりひもいとぬゆゑ　ふまちぬ　ゆゑ山　梅乃月

右のうぐひす　梅ぞもいづるも上のてゆきそのうぐひすのこ

へも及ぶべし

○上のてゆきはのうぐのひろとけ下まで及ぶ梅

古六　ゆきのまだ　毎年　花ぞ　咲ふるいづるを梅　と　ゆてゆきほし

□　□

□一六　ふるまえよ　と　ゆきけうぐひすのこゑ　生とまく　咲ゆ　梅を

□

後六　いづく　と　てただ　ゆきうぐひすむらづゝわをハむづゝ　ゆきえうぐひす

□

新十一　みゆけ　ふるえて　ゆきうぐいづゝ　川いつえき　とてうえ　かゆうぐん

□　□

四十七　時しえぬ　山ゆゑ　梅ぐ　けるりん　と　てうかのとまぐ　代雪の　後ぐん

□　□

六帳　きのふきて　ゆうひぐかり　ゆ　雁衣いくよへぬ　と　ゆ　袖ハむづぐん

□

ゆるぐひ　ゆいしれたり

○と□二つ三つ　ゆうあ

古三　うぐうぐう　と　えとバ　ゆあるえゆ　衣をあうぐ　と　やうゝ　山ゆうぐす

後拾一　いふゆ　梅ておうぐ　ゆ　ゆしふゆ　とぐきのふゆをうぐ　と　ゆふゆを　と

後十　うぐ　ゆ　と　いふてうぐ　ゆ　ゆうぐ　と　ゆえぬ　と　ゆバ

□

○うぐのうぐ　ゆと

古一　うぐ　と　ゆうぐ　と　光うゆぬ　ゆを梅　花ゆ　乃人　まふうぐひゆぐん

ゆ二つのゝ　□　ゆ　ゆ　ゆ

同八　和おうり　と　ろる月日をもちてぬまふかとて　ぎろふかとぬしとうきく。

○ろもとはうとのと　ろもハ雖宮おもとし

金七　たちあがりきうり　と　ひのそ　ぎ　ろもとぬぎまそ　匠　そぞ　ろ　ろへで

新十三　ふの色ざバ人をまれちれ　ひろり　と　稀るまー　和をいさようひの月

かまろふ　日記　ひろーとぬくるる家ふ　笠ざれろふ　ぎろり　と　ろひやおろーん

撰集　後拾遺　ろぎとこがひろふ　ろりせざろり　と　ひとがをとそほ　ぞろきの橋

同　色ろーかく　と　色も及ぶをとめこがひはぎとを作に入せほし

拾遺　抜　掃ぞと　ぞ　を　晒きてどしいろ六つよそ。ろもをきを。左のかく。はをひらとを　晒きてぞ

いてろバしいやしげそ　ぎろ。ろふその例まれろもし。ぬまーかふる薛よろん

○一つのろも

後拾遺　十五　あーしろ乃ふりあひろ　ぎろ　ぎろ　ぎろ人を持本ろり　と　と

後拾遺　十一　いそぬまはまぞろもしかーろり稀くわが見ゆべき人ろろれ　と　と

新　十七　たくふ山乃ちをはちろもに　ろべよりいづとろ春はまろる　と　と

後撰　六　ひろーぶふ程ふろはをはちろ秋乃月ろ　ぶ　ぶろりのいくめぞろ　と　と

こぎろーのろとハ　ぱつ　ふの雑　ぎのとはろとーハ別ろーて。ぞ　ふとのはろる和よ

てとハ惟ー。ざろ　ふとそとひてもたぶハぞろろと

○一つのと

古十一　ぎろーはきおりひやぞ　と　わ　ぎきのまぞろれぎろ　ぎ

ぎ　ぞとハーぞ　ぞそて。とよろ　ぎ。ぎとかよ例ぞーぞしき稀ぐ。六作ろりハ

ろふぞーとてとろぞーぞ。又後撰十七則ろーぞきとひやぞとろぞーろ

の稀ふろくまぞふ堂ぞろびーき。上三百金くたのたろのろと同ぞ。似ーこきハ

ぞとぞふくーいとろる本堂。ろーまとろーバつよのーとろり。

同五　とがきろる方ともろーまびろーぶ山ふーはこのとのちろ　と　まがふふ

書ろく　赤　ちぞーとぞろぞろーろもちろ　と　まがふふさろるろと

式之[illegible]と色づし

○一つのそと

[illegible]

廿八　よのあらはいさ[illegible]いさやゆらはやとも[illegible]ことぬかて[illegible]

[illegible]

○お對へ[illegible]ふと　典侍のさし

こまハ文と結と。[illegible]お對へていふとそ。[illegible]

但し常はてゝをそのとき上を切り梅の韓より[illegible]

はぐく梅の韓　[illegible]

廿三　文と秋と　ゆさうふ文詩毎ひとりハかゝへきぐしに風やぬらしん

加やうに二方ともかゝうやきてまり

同　ちり紙ぶきもぐ[illegible]

[illegible]

廿八　[illegible]と本と　立ちゝ[illegible]と　やうゝ[illegible]いづとかゝ紙ゝつゝ結唐

加やうに三つ[illegible]

丙巳　月新のさ[illegible]秋[illegible]と　ぬあゆけ[illegible]

こまハ[illegible]

の方を主ゝ[illegible]

○[illegible]　三の巻ゝの[illegible]

○[illegible]　この巻よの[illegible]

○むけを五

○おのよりと結上るを切る。切る結の辞とハ
おも結ぶ切るなり乃
辞より終るが定まりなり。
[illegible]の
辞あり一二例をいたす。[illegible]
[illegible]
が定まりなり。[illegible]
[illegible]
又[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゐ〜ゐこ〜とをきハ今出さぞ。清うく社とき上のとの紙ふ出せうさて帰るか

〜に志うどと志うどく〜つふ〜〜ゐ

古十二　海ふをきて むだ〜ふ志う どと 書ゐ志うゆきふ〜社ととでこと へん

八十八　人ゆ〜を雲をいそひて志志う どと なく〜社ゐやこと〜に志ゐ志うゐと

新十八　身ふちかく〜まふゆる世を名ゐうゐる歌をばよをふおりひ志う どし

古十九　〜人〜〜ゆ〜〜とハかゐてき志う ど きのふゐくとハゐハぐりしを

後十六　むさ〜〜空は社むづで志うゐをき志う ど と志ひくさに八ゐひるびよき

千十七　く〜ゐめ山花をまれ〜そ久〜ゐ乳き社ゐやこふ年八をゐ志う ど

山志ゐハ〜〜その紙びの志ゐし一つゐう。さて 志ゐどと 志ゐどとハ。志ゐどし お射了

辞ゐう。

山ゐのどどと八出〜ゐ〜ゐ〜ゐも脇〜

を

○ほねのをハ志〜ゐ〜〜なゐをハ出ま蔵

○やを発縛ふおく〜を

古十三　人志ひさ志れて書き 二社を 〜志れで着と いまも志〜ぶと。 を いえん

後十九　社ぬをて志かをハをとを志かう志ゆく〜志ゐひそきゐ志。 を 志ゐん

板十　ゆふ〜をを志ゐ〜ふゐゆをハ日で〜り〜ゆ〜をふ志けてゐん。 を 志れ

後拾十九　まゐび志紙志がまゐ志〜いのを〜て志カ送ゐ乃志ゐ〜 を 志ゐよ

玉三 新拾遺　五月西社月のゆのふゐ志ゐ歌を社ゐ〜ぎを〜ぶふさやゐ。 を おき

古四　萩が花ちらしんかなさけ寄ぞ　を　ゆうんさよハぬくとも

同又　立ぶりて。を　ちらしんりみだれ　ふるもあハまちまちに

同十三　ちひしくばちらふ。を　かりへむしまたの袖もうれ衣いろふりげあゆ

同三　ますかりて。を　ちらん秋乃月こしひのすふ寄なかしなん

同　寄きて見がちろもてる袖なきをもちて。を　ゆうん秋萩乃笠

同十又　ちがうちうえつ。を　きらん作弱山寄みかりそ面ちゆうとも

○ちのをけさのを

古四　ふちのしながひるもちハ女郎花わがもむ宮ち撫てみまし　波

同又　秋のきしあるりふりはうぎしてん花ちうきと寄ちうなるが　を

同十　秋ちまどの月のうしれみやハちうれ花ちちしひだかちう　を

同十六　結ひてゆくさとハかなて寄しうどきのふりあとハ思いざりし　を

同十七　うれしき波あふつてまんかしちちもたりをゆうふたてとつまま　を

同二　寄ちのしゆうしぶちうを　ちちしひいうふちちとちゆれ結ゆくちん

同三　夏結秋をまぐようひあうしゆうを　寄のいづこに月ゆどしちん

同五　ちしあれ秋をちしちを　いふして秋の木紫波ちでにそむちん

同九　人の対をあしりしあを　ちのちびていちこちちうんちひやちゆるち

同十二　をしくやちひちあまし　を　あひえんし秋光しこを寄ちうちう

ちのちびのをハりのをしふを　ちふをしこをゆにちちしふを如へちちあを

ちふちうをちをちをハ日ト

○ふちをふを

古五　花乃いろを寄をまりまで見そ見たか　を　ぶふをへ人のちを

後拾八　みやこいづらくさぐかりごふをつらふを聞て人を[を]とうれまーうハ
　　古今集の初古おどうと仏を[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
○一のき
古七　[illegible]ら[illegible]比勢なーあくに都ゑちらは年を[illegible]
四十五　[illegible]ごーと[illegible]を[illegible]ごーゆ[illegible]ゆ[illegible]
　　こまハ[illegible]

[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

後拾十三　[illegible]せで[illegible]
玉九　[illegible]
　　くやーまのそぶでうぐふをれ[illegible]せでうすーまそふとぐーあやそ
詞十十九　源[illegible]せでいづまの[illegible]
　　[illegible]
万十一　[illegible]せでたが[illegible]
赤染衛　[illegible]せでうに[illegible]
　　[illegible]
　　[illegible]
○[illegible]
古十五　[illegible]

○[illegible]

月十七　ぬきみだる人こそあらしまてしまたくもちるる袖のせゞき　永

後七　秋の世はあしきのおとしるあるる武蔵あきあるそめゝとふ　永

百十九　せゞらぎ　まかりし時ある人のもとに菊まゐらせし侍り　秋乃月きまくるね　永　出ぬまゝ山ゐる袖はるくきそ　郭

秋三

月

きはおもはまゝかはるね　永　夕ぐれちはきさりぎあくをめる月うゝ

たのたゞひのあはぢかゝてプよのかりゝ人をうう

○なくあ

古二　ちらくまちくぶちらうんちるそなゝ人のきそもそあく　永

月十四　ちのくはきのぶりちをあ淮ゆをよみぞくうんをふかるうあく　永

月十七　きををうとまる人くはんうる砂の松もむくはなあくあく　永

月二　まをあくりあへるあをちうあく　永　かさへうくしゝ山ゆきはをあ

月十九　むつぶをとまゝぶ侍きあく　永　昭ねをりいづくへ秋乃きくちよはあ

○あくあ

古十一　淺茅生はかはの志のあをぶをと人をくくをやくよ人あく　永

百四　てる月をやうふえをくてなく淺ちををしつるをへあく　永

古二　うゝむべき地とはあく　永　をうあくくもちるむゝうふあゝうあ

月三　はうくゝをとあとはあく　永　うのひはうきよのかに咲くくくん

○一つのあ

新二　赤人　まをあをくくあゆりををうをまゝををぬ人　永　ちくまくしもを

こをハ茅茅ちうををををををあ

けくゝひのあはりくこをれあを

○あはをを

○一つい水

水四　まく、秋乃うきへのあふむうまり風花が風水　座詠月新

月四　つきとまくる座をそるさ　条　雪は雪かきれハつくのふるさをの秋

月十　うめ〜きかうれをひるなるひるみまちえ〜育　水　今の為

あ〜ハこまて竹と二つをひ〜ろる間みをめるふりでいせ〜ぎり

はまるあ〜ハ仰ふるて〜ぎ〜。凡雅又陸奥極を抽品へとそるるぶあ〜しま

るより為〜る月ふをを〜うれあ。はるるどひをるろかる。月ま春のをくを

いつるまて。月と春とをうぐ〜クハまを　まるハ〜ぶれバをう。

○二〜のふ

風一　ちく〜ぎないぐやるぐてふたをりてをとふぐ春の長　水　ぎ〜ん

新撰拾八　秋　水　ふ〜ま　ふをひも世をとぎ〜ま春のをまる座の春〜菊

はるぐひのふりではふいや〜〜はる。秋ふ春〜　などハ。返き安ふハはるふ乃

るふあるねをど。なきあるハ月〜ぐ〜ハ秋月〜〜いふべきふ〜

○ふせん水　但の春伊の詠り出せる

○　水　但の春かの詠ま出せり

ふるをさて、ハりでたるぐ。やむ〜えどハ秋月て〜〜をいるあ。式ふ月秋まろ

春ふ〜ふるるをるるをきれぐハ。をそをまのをはるるるれバをく墨〜し

て

○はるのてハ春〜はるて春〜

□□□□□□□□□てがるてきる

○てきて〜〜てぐてよてんてきんてまて〜てがるてきる

この春ひのてハ法の春用し。はるタ云の春つつるの詠り春く

いふを春ぬべ〜。○てきるをいふ時ふを春りてよむハ秋がるし。春べき

○春詠を又

後二 かくあがるちりでよ紙やを法らて［て］ぬ花のさきハもあさとるべて
山てとたのてと一つまり法与上ハさらひまらまる事どもと
人のこころにわれやを出るといふるあの下るとは同じ格めてふをそも

○あて［］

新十七 よれ井沈こころだくもへうふ形らでれをすの品ひ［ふて］
後十六 おりひつくをふるらしをるべ［ふて］ある中る相さこと、おりるを
月十八 今こんといひしでかるまいのちふて［まつ］まねべしはをめれらで
新十八 ものしまれるあがくをるべ［ふて］らつぬれもの宴紙るん
月 まりがえれかるる枝をすべ［ふて］ものそらべきはるのむかれ
月十九 むとすしむものちがをれ［ふて］やくまみ深の花きよきく
後拾十 まれりまるをそのるべ［ふて］ものれてやれていをぬ形るを

新四 海苔乃高はよすがをちぎり［ふて］里をバをびれしきふるを
月 ヨりこるおりひを荻のうハぐ［ふて］此ぢろうをし夕ふれそら
かくのぢく上らをしかるてしをとりつ一つの格うり。
此ものの［］ハちかるこう

○ぢて［］ぢしてのまも

古今 はるゝ花ひつくみのうぢきをさ月いくつきのるをまう［ぢて］
後十四 月十一 浪乃よりうるゝ小海のなぎ久しくきりぬをふあて［ぢて］
古四 秋萩をちぢうを畑せてちく藤れ光ハて［ぢて］寄れまやりる
後二 ものこと［ぢて］寄ハをまうれ立ちてりをへりりかり吹りりる武
月六 ヨぢ宮どは尾ぢぢうへのちく寄を者ると［ぢて］ものふぬく相ふもぢ

○てへ［］

右大　今さいにうぶべき人とおもひしだに八重むぐらに門さすう　てへ

拾十七　むぐらはえるきやどのうちは紫とこの外にてそあるうるる　てへ

同十八　こゑのうちやるりうる　てへ　だこうる砂の毛上ふたてる　松もみのうり

六位　ちらひ　てへ　ぢまるぬそふをつりうるくふあやしくまぐふをがんうれ

これるくハとゆくをつぢめてて　てへ

はるぎしぬさそこゑハての砂ふへべき様よ　ぢ　ぢ　てふとゆふまてん

○てさ　三の巻ぢの砂ふ　ぢ　ぢ　ぢ

同十二

[illegible]やくの[illegible]そ[illegible]

金春三[illegible]の川　[illegible]の舟に[illegible]

[illegible]

な

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

山なる日ドヨミ

○空のうつる

十 人えうら我うえたや[あ]えもうきなとうほふ出て恋ひしるけうん

後六 いづうふ東を成ぬうんおがつう[あ]昨ぬかぎうハ秋ぞくぞくうん

拾三 えこぞ秋書きけうひの秋風ふ系さへあや[あ]人ぞ恋しき

山なハ狂いとうすーるぞくうべー

○勿れうえのあ

古三 文山うなくほとしきとんけうばぬぞふ秋ふ[あ]きう世そ

同四 よくうさ秋空のえもうくく秋のみれぬひるうんん人[あ]とが名そ

新九 きぞーしさハいまのきけうふ系きうえうう風乃風[あ]うきれそ

古一 きうきうとうふハ[あ]やきそ物つうをとうのかう系しこのかう

同 山きかう人とこきうきそぬちうくひいくく[あ]うとびそ系てくやうん

同五 ちひーくくてくてこうのくんのみち義成き[あ]ちひしそんあアーの風

壬二集ふのひ秋のお系とんてうーんかえうーくくきそひふ。有。

のかき系あーしそいうふぞやすぬ。ぬ。おぐきそうそうべき空うぐ。ます

万七 妹がけうこうこう種ぬくんん本うーうーいぐくう月ふき[あ]うのおぐき

同十七 系なのーー。[あ]うびーーうとぐぜく郭ふわうんさ月をむ浅ぬうさ系

ぐ月アハトにそうーをー。[あ]ぞも系系はハ山術おアー。古うよりこうこうこはー

うーぞ。万系えそその下へ山ねをえくーそねくーくうも系ーしのまを古風の祝

ふ出きう。四十七の恋ぞもうふハ。[あ]ふ[あ]ぞーふ[あ]ーーー

拾十六　花の名をうつしとるもしるべひとの袖ぐちの枝みる　[み]ちふぢ　[　]

元浦集　夏ぶきたち　[な]なつそうす　[　]

こめ〳〵ハなを二つまゐらせ。一つハ[illegible]
しらげ例を六帖ともに[illegible]
ひなを出してべくらあげ置うつ[illegible]
まし

古二　ひぶき草あやう　[な]なつそ　[　]

こゝ人ハなめ〳〵二つまゐらせれば。上のなハ[illegible]
のなを。つゆやなく。されそとちる年ぬ[illegible]
○云帖[illegible]ゲせこがゆうこゝ[illegible]
なを累きて下ふそしのこいろ[illegible]
上のなを累くしこハ例もなりしなし。[illegible]
こいろを直せし温じまくてゐ帖のくし[illegible]
なきそうし。こそ夫木保仲ひぶらぬ[illegible]
名入つちゆ。同家百牛のまこし[illegible]
ぢたのこそ直しこのなもなゆじ[illegible]
しなりゆ。[illegible]

ちのが　[illegible]

[み]

○一つのみ

古十一　秋の野ハ花もむそ[illegible]
同一　ちはきこうかそ[illegible]
同十　秋の野にやどうハ[illegible]
同十三　係やうる夜の美を[illegible]
後六　秋の田ちるそ[illegible]

○おのを五

○ちを

百八　春はすぎ[illegible]

後百十　天の川　せゞはやみ　[illegible]

古又　さかゝのもゝ　[illegible]

同十六　かゞゝくに　[illegible]

同十五　ゆきかへり　[illegible]

後云　[illegible]

同七　藤なみ　[illegible]

同　秋の月　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古十三　[illegible]

[illegible]

○一つのみ

後拾一　[illegible]

千一三　[illegible]

後八　[illegible]

後拾十三

みちのくにをくにえぶみやこをんなに　むまれてつ

百十二

つづさらをき　ゆくし　ゆくし　ゆくしもむとて　ちぐふこころをうゑ　おを

はかり　あひしらぬ　ぎくに　又　をくに　いろうこ　ぐとも　業にあり。又　こと　ゆりこ

こと　又　ゆくに　わらひこ　ゆどあり。又　業第十八　をうに　をとあ　みつく

をもしやをこ　伊勢の神　ゆもくきを　かぐ　ゆ　おきてかに　こと　なうあも

こまよ　は中に　かぐ　ゆ　ゆくに　ゆ　ゆ　ゆ

拾十二　長話せうしおるをきいたつる人きゝ分をつとてどふ人のうつゝぬ　よ

同　ゆふ月まぬ花のちるもしらぬぐ　ぬしふくぐ　ぬしハ地をたゝふ　よ

長拾九　さらば　よ　とわるもしらぬ　ハ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

拾十　おひしぎ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

新六 ながむしまばとが山のをふ音をあらしみやこの人よ[よ]

狭衣 早苗はいそこ[よ]ぬりてぞくめる[よ]

こゑ〳〵よ二つあてでよ[よ]ゝ呼ぶをよ[よ]下なゝハ作もゝよ[よ]ゝ玉菜十ばかりきざみ

きさをしくこゑてなゝ[よ]ゝ品ひ出よ[よ]ゝ夕菅の[よ]ゝがくきなゆゝハ[よ]ゝ

○てよ

古四 ゆきかゝるこゝ[よ]ろ天の川ゝ原のゝ[よ]ゝちゝ[よ]ゝゝりゝ[よ]ゝかゝ[よ]ゝ[てよ]

月三 たの名ゝかゝ[よ]ゝでこゝハ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[てよ]

任家 長星に[よ]ゝをまゝ[よ]ゝゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[てよ]

新土 なゝ[よ]ゝはゝ[よ]ゝゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[てよ]

いせ系

後拾十六 いのゝ[よ]ゝゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[てよ]

詞十 かゝ[よ]ゝゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[てよ]

万二十 ゝ[よ]ゝぎゝ[よ]ゝゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[てよ]

○よ

古三 やよやゝ[よ]ゝゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]

万七 ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]

拾八 ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]

金八 ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]

月十五 ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]

後撰 ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]

○とゝ

拾三 ゝ[よ]月ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]ゝ[よ]

接衣　月ごろハきさせ　よる　つのくれぬき　衣よそふるかゝ　ひかくうぐひす

月　かとをえん　よる　おりひきえんぞうもしまおくるまてハくもゝさゝほし

孫

長十　おりをんと牧先一ちゝ物をなきえんをたてゝなぶ　ね

教十六　つゝふことはんゝをあゝ一ゝゝとゝやハ苔りしゝまきて　ね　と

長十三　ゆきて　れ　ね　といひしゝゝゝゝゝゝ　ね　そぐ　をゆきよれゝゝゝ

月十九　えが代ゝを鶴の歌ゝゝつのそてき　ね　そぐ　をゆきよれゝゝゝがひとおく

教十九　あふゝゝ代月月代をゝゝゝまり　ね　ゝゝ　ね　ゝゝ

月十六　まゝ蛍ハ花のゆきまゝゝふきまて　ね　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

教十一　ゆゝをよゝゝをゝゝ　ね　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

月　年ぬまでよりハちかいぬまんハほとゝぎを　志　ゑんがで　ぬ　ほひもちゝ

二月　まてゝいつかちで　志　ゑゝと　ぬあゝで　ほのを　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

月　のゝゝかゝちゝ　ぬ　ぬゝゝゝ

古九　はのぐさ　ぬかるみ　ゆく　恥　志　ぞ　思ふ

月十七　ちりやすき　字　の　姿　ちる　ふれ　を　志　ぞ　ちりとて　ハ　ゆき　ぬ　と　で

万八　たちなる　ぬ　花　ちる　里　ぬ　ふ　ぎ　と　か　き　と　志　つ　き　く　日　志　ぞ　ちかき

月十六　ぬ　ハ　ふ　を　志　を　ま　ま　や　と　べ　も　ま　き　志　の　く　つ　て　袖　の　く　志　ぞ　なく

ま　く

古二十　あ　く　し　ぬ　年　ぬ　ち　で　め　ふ　か　く　志　て　そ　ふ　年　を　か　ひ　た　の　き　を　つ　え

八世　ま　ま　や　こ　の　天　ぬ　ま　で　ま　と　ひ　べ　志　こ　そ　ま　ま　み　き　く　た　て　ま　ま　り　ま　と

こ　ま　く　ハ　志　て　そ　と　で　き　る　ま　し　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

古一　ま　き　志　ま　と　め　て　き　り　つ　く　ま　が　く　く　と　ま　ま　ん　心　の　さ　く　つ　城

月廿　ま　ふ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

古十四

とぐしてあふぐる秋より【志】もろ〻形に虫のひきけばまづそかのき

同十五

秋はてゝ月をみて【志】ふるくゝ人乃ゝ[illegible]ふるこゝろん

同十七

かぎりなくなげくゝ[illegible]ゝ時【志】もわるぬ秋より[illegible]

同十八

いくよ【志】もうつゝ[illegible]ゝ月をみてゝ[illegible]ゝ[illegible]

落十九

ふるゝ[illegible]ゝ[illegible]【志】もうで[illegible]

古十五

いま【志】ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]

これハ古風の格にて[illegible]例あり。[illegible]

二つゝゝ[illegible]

ちゝよ[illegible]の志りゝの格[illegible]

[illegible]

[illegible]

新千載

我うてゝ君が七代ゝ[illegible]ふさゝ[illegible]

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

古三　[illegible]

同十三　[illegible]

同十六　[illegible]

文三　今[illegible]

[illegible]

[illegible]

古三　むら〳〵へやいづくにか[illegible]

同四　三の川　[illegible]

拾十一　[illegible]

同十二　[illegible]

同十七　こゝに[illegible]

[illegible]

文亀元年　[illegible]

[illegible]

たの外。芳樂ゴハ志ゑとゝいふやまめ雑拾さゑ〳〵ふもあり。七の志ゑ

古れたの紛ゝ出さる

雅六

さき〳〵志ゑ行き秋志ゑ人のゑかゝまばいと九月やとぞ考ゑかりける

れハ志ゑ二つゑ。上ゑゝハゝゝゑふゑ志ゑ。下ゑゝハゝゝゑり出てゝゑる志ゑとあり

ゝ後ゝゑ十ゑ月ゑれてゝゑ志ゑ。ゝ秋ゝゑ志ゑ。ゝ秋ゝゑ志ゑ。ゝ秋

らく

十四 はらくぞなりかひくのきおい[らく]のこんしといきまきまぐあり

十五 塩みてば入ぬらくをもるかまやえ[らく]まくすくこふ[らく]のおい

此外はこれを方策に考しゝ七の毛ちれのもりしおきり

まく 附[ま]

十三 らくづくふはきてハきなる物ゆ恵えて[まく]ずくるそれて

十七 ふりふぐちまきねきくハかくなくまく[まく]性きはるぐたりける

十八 いぐくにとが母々ねうんをかう や伏えれ星乃ひと[まく]とをく

十七 くをもをねとを毛くる法乃ちぐくとえ[まく]のそきまづしねうも

十六 事をうすみかきしかつめるかくるづるあづさハ[まく]のほきまうね

きべのくるる時を常にのりを落とをり。ふれ 多楽ふ見ひさ毛ふく

ゐるれり。七の毛ちれ物くり出せり。天 まるるも無法りけ川とおきて

を形ひうしごとハいみ

一ふれ むがあ、ゐり

又件のまくハ暑きてまはをり。えまり。きうまをしるぐのしるぐひし。

新考十六の字ハんまくきうもしよ考。

元亨 星よぎでまげもあうぞんほそぎん身よりれるもつとへ[ま]えや

これをトへをを作うひとをづしりハくの場う永行ぐるや

うきくよきく古十八
のきくの初の
発句なり
ものを一
の助動詞し
せと同形
を置られ
まいらす

きく

附 きー きき

第十六 きく ふあきぬおく山戸、春常に重るゆきやをゆきし

同十九 まえるれどるゆぞハよ きく かゝるやのみぐ〜そけるとどあこ きく もを

後三 さく〜ふりきく〜ふ衣の源をこゝろ月日のを〜 きく とを

古新 ながき きく をたのそらゝれよの中ハ世をうぐのかゝるををりて

うぐ百家ハるひゝ きー こゝ きく おゝきー やとき くゝ ゝるき くゝ 福ゝきく ゝれゝ きく ゝつゝ きく ゝるどゝり

又 きく 雑 きー さむ きき つゆ きを きるどの きー きき ハ たゝの きく し可

ド 雑 ゝゝ きゝ て を ゝ ゝ ゝ

後拾十四

かのいまは あはれのちぎりきしぬべきこの紫ふじのかをよ。かゝ

同三

みるをうみもしつゝ ふるこゝろにぞ。かゝ 波もをしてのみぞさしつゝ

同

ふる さしらて 時ぞやをいかん 秋のよもすがら。かゝ 桜のとがりをぶか

千十七

ふるもしらぬ 春の雨ぞ。かゝ と思ふもしん春りー まはいそう方

新一

こゝへこ かゝ 梅さかりなるとが宮ぢうちにもくゝをまりたてそとれ

いせ物語

立ー くばきてしとゝよん。かゝ ちぐぬ 神のいとひそこ ふくふ

大和物語

はて 吉きみ ふるもとの。かゝ そも八 なくまりのしや思ひいづべき

（元輔 春に身はき 身は 秋 ふ 春かゝ えてもおぼつかなし そもしきねかゝ 先 八上 ふぞ しぬまぬ しと思べき。ぬかゝ しといつ八 ぞの 秋 静 ものり）

後拾十七

と へかゝ なへくゝ ふもしに じ春の ふを まがゝ しと 春 ふやかゝる と

新八

と へかゝ なかゝ ふくゝ 春の ふふもしも ふふ ぞ ふのかゝ 分 秋の 林 ざ 先 を

かゝ の ふゝ ゝ 下へ ふを 侍て とゝ ふ 又 後拾中 的 文 拾 何 ふ 八。かゝ やとや を

侍ていつる とゝ ふ と 又 ⑥

拾 ふ は かゝ ふ。えよかゝ ふ えかゝ ふを どいつる 雪 ぞ ひのおわきにならひ

下。かゝ ハ ふで 彩 ふ ふ の 歌 ぞ ふ の ん 彩 る ハ ふ ぞ と し。たゝ ゝ 引 る 高

ふ と ふ 中 ひ と 彩 ふ ふ と ふ あ ゝ ざ る こ と 美 き を 思 べ ゝ。又 文 ふ ふ ハ

ふ ふ 此 ふ ふ を た ち き 中 に き かゝ ぞ 星 かゝ つ かゝ ふ

ん かゝ き ん かゝ ぞ と 侍 ふ ゝ ゝ つ る ま や。